

## 鮮魚センターを中心とした寺泊町観光の形成に関する史的考察

○早川章治（株式会社 表養樹園）  
 鈴木誠（東京農業大学造園学科）  
 服部勉（東京農業大学造園学科）

### 1. はじめに

昭和30年代～40年代後半の新潟県三島郡寺泊町の観光は、夏季の短い期間を利用した海水浴客が中心であり、その数も年間30～40万人程度であった。

しかし、昭和50年代に入ると新鮮な魚介類を販売する「鮮魚センター」という新たなレジャーレクリエーションスポットの出現により、連日大型観光バスが横付けされ、平成元年度には300万人を超える観光客が訪れるほどに発展し、「寺泊」はいまや全国にその名が知れ渡るほどになっている。

本研究は、観光客数の大幅な増大をもたらした「鮮魚センター」を中心に、寺泊町がどのように観光地として成立・発展してきたのかを歴史的に探ることを目的とした。

### 2. 研究の対象と方法

新潟県三島郡寺泊町を通る国道402号線沿いに立地する「鮮魚センター」を中心に、以下の3点に着目して考察を行った。

- ①鮮魚センターを構成する4業者（角上魚類(株)、山六水産(株)、寺泊中央水産(株)、寺泊浜焼センター(株)）からのヒアリング、町史などを中心とした文献調査による寺泊町の観光動向。（図-1）
- ②寺泊町の観光客の推移。（図-1、表-1）
- ③国道402号線沿いにある鮮魚センターを中心とした市街地の変遷過程。（図-2）

### 3. 結果ならびに考察

#### （1）鮮魚センターを中心とした寺泊町観光の変遷

寺泊町の観光動向、観光客の推移などを基に、以下の3つの時代区分を導いた。

##### ①草創期／昭和30年代～昭和49年（1974）

昭和45年（1970）、寺泊町は従来の沿岸漁業の不振などを背景に、観光立町を選択、また県の観光拠点（海洋レクリエーション地域）の指定、弥彦山スカイラインの開通など、寺泊町は観光地としての基盤が形成されはじめた。この時期は、現在の鮮魚センターを構成する業者が、前進的業務を開始しはじめた時代でもある。

しかし、観光客は年間40万人程度であり、その中心は夏季を中心とした海水浴客が大半を占めていた。

##### ②発展期／昭和50（1975）年～平成2年（1990）

昭和57年（1982）、上越新幹線の開通を契機に観光客数も増加しはじめ、昭和60年（1985）の上越新幹線の上野駅乗入れ、関越自動車道の開通は、大幅な増加をもたらした。観光客は200万人を超えることとなった。

翌61年度には県外客が県内客を初めて上回り、特に関東地方の観光客は県外客の60%を占めるなど(表-1参照)、関東地方に直結した交通網の発達が寺泊町の観光に大きな影響を与える結果となった。

また昭和50年代に入ると、山六水産(株)を皮切りに角上魚類(株)、寺泊中央水産(株)、寺泊浜焼センター(株)といった「鮮魚センター」を構成する4つの業者は次々に会社組織に転換し、その規模を拡大していった。

同業者が軒を並べることにより、各業者は共倒れになる可能性もあったが、昭和59年(1984)には、海岸通り魚商組合が設立され、業者間の連帯感は強まっていった。

また同年には冬季の売上げを期待し、スキー客の集まる新潟県湯沢町や埼玉、群馬県など関東地方へ進出を図る業者も現れ、県外における寺泊町の知名度を上昇させる大きな要因ともなった。

鮮魚センターへの観光客数は、昭和58年度には僅か8万人程度であったが、昭和60年度には50万人、62年度には90万人を越えるなど、海水浴客が中心であった寺泊町の観光の中心的存在に鮮魚センターが発展してきたことを裏付けている。

### ③成熟期/平成3年(1991)～平成7年(1995)

寺泊町の観光客数は、平成2年度の307万人を最高に頭打ちとなっており、平成7年度には260万人を割るなど、年々減少傾向を見せはじめている。

また鮮魚センターへの観光客も昭和62年度以降、90万人前後で安定し、横ばい状況となっている。

このような状況の背景には、昭和60年(1985)に設立された静岡県焼津市の「焼津さかなセンター」といった同類の大型鮮魚センターの出現も大きな要因と考えられる。

現在では、更に多くの観光客を誘致するために、鮮魚センター前の歩道のアーケード化などの計画も議論されている。

### (2) 鮮魚センターを中心とした市街地の変遷

関越自動車道の開通による観光客の増加を見越し、鮮魚センター前の駐車場および駐車場周辺の道路整備が行われた。

それにつれ国道402号線沿いに各業者が店舗を拡張し、昭和55年(1980)当時わずか1200㎡程度であった鮮魚センターの敷地面積も平成7年(1995)には3.5倍に相当する4250㎡にまで拡張されている。

鮮魚センターをはじめとした通り沿いの店舗は海岸線と平行に拡張され、さらに線的な広がり、柏崎方面へと伸展している。

一方、国道402号線沿いが賑わいを見せ始めると、市街地にあった旧来の商店街は、次第に活力を失い、町の中心は、国道402号線沿いに移行してしまった。

## 4. おわりに

現在の寺泊町の規模、鮮魚センターをはじめとした観光施設では、成長期に当る平成2(1990)年度の307万人が寺泊町の抱えることのできる限界とも言えよう。

今後、鮮魚センターを中心とした寺泊町が、観光地としてより発展するには、成長期に見られるような量的な拡大ではなく、質的な充実が必要といえ、それが寺泊町の一層の地域活性につながると考えられる。

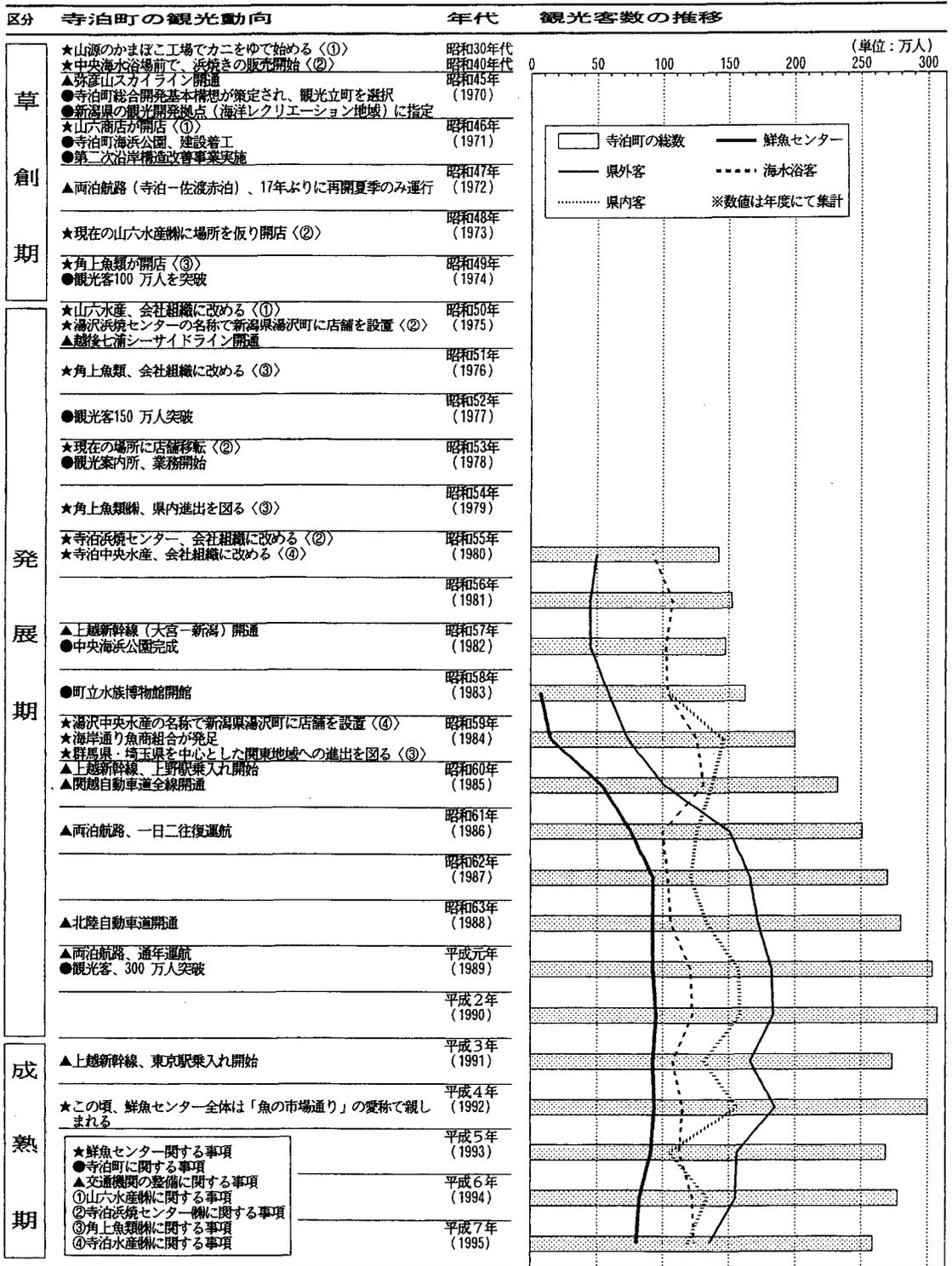
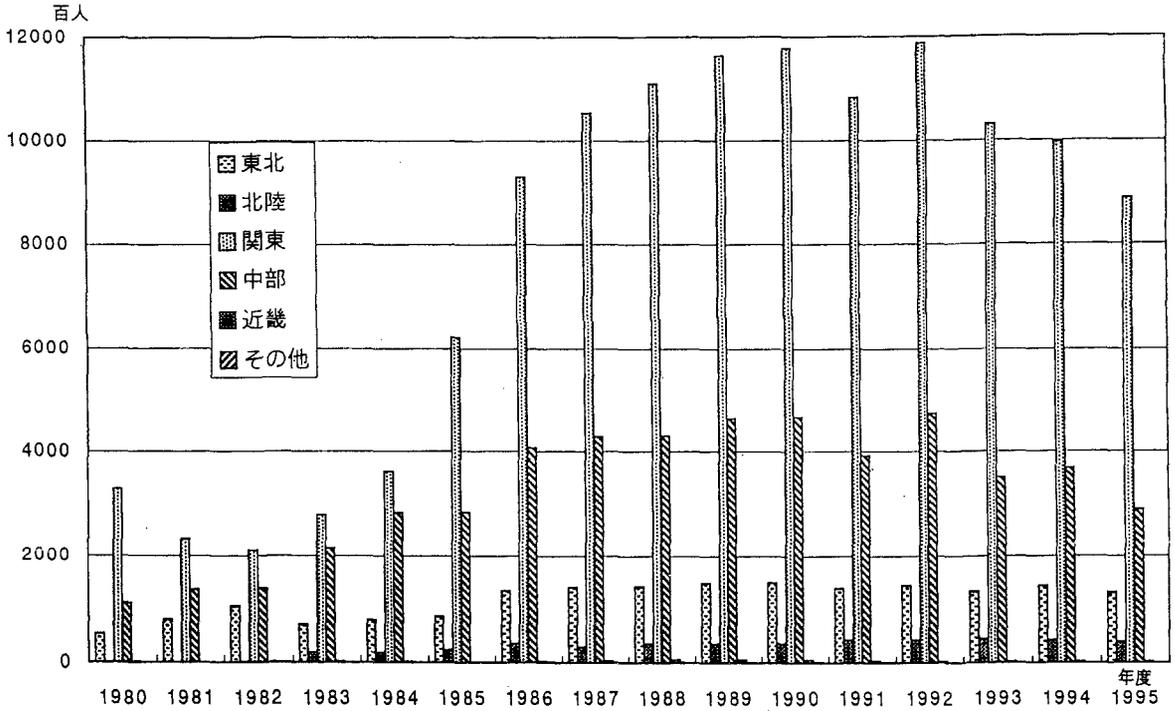


図-1 寺泊町観光の変遷と時代区分(早川、鈴木、服部、1997)

表-1 寺泊町の県外観光客の推移 (早川、鈴木、服部、1997)



昭和58年(1980) 面積/1200m<sup>2</sup>

昭和57年(1982) 面積/3300m<sup>2</sup>

昭和58年(1983) 面積/3500m<sup>2</sup>



昭和61年(1985) 面積/3800m<sup>2</sup>

昭和63年(1988) 面積/4000m<sup>2</sup>

平成7年(1995) 面積/4250m<sup>2</sup>

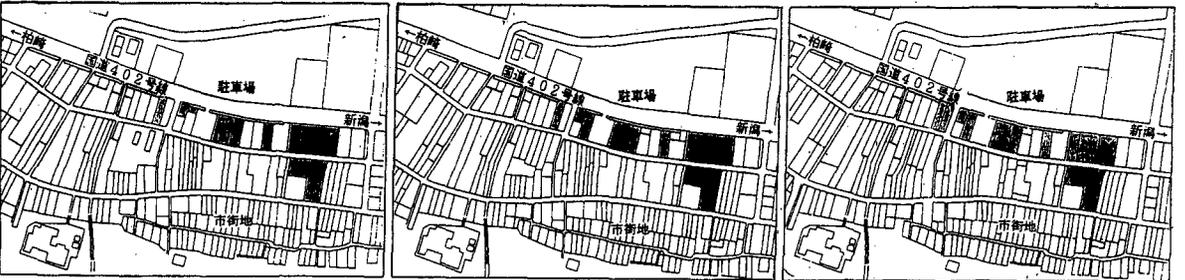


図-2 鮮魚センターの敷地面積規の変化 (早川、鈴木、服部、1997)

200M